慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	対抗資本主義としての地域通貨の実践： スペインカタルーニャ自治州での調査報告
Sub Title	
Author	織田, 竜也(Oda, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.) ,p.65- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000054-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

対抗資本主義としての地域通貨の実践
—スペインカタルーニャ自治州での調査報告—

織　田　竜　也*

1. 序

筆者はこれまで文化・経済人類学における交換理論を中心に，交換規範に影響を与える強制力に注目することで研究を進めてきた［織田 2001, 2002a］。博士課程におけるフィールドワークでは，そうした規範が「揺れ動く」地域における交換現象の調査を計画した。

そこで国家連合としての「EU」に加盟した「スペイン」の中でも，とりわけ政治的には穏健な独立意識を持ちつつ，経済的には最も優秀な指標を示す「カタルーニャ自治州」をフィールドに選定し，調査対象としては近年世界中で増加している，リージョナルネットワーキングとしての側面が指摘される「地域通貨」活動に注目した。

「地域通貨」にはいくつかの種類があるが，LETS (Local Exchange and Trading System) と呼ばれるものが良く知られ，かつ最も普及している。LETS の起源は十九世紀前半にロバート・オウエンらが考案した「労働貨幣」に遡ることができるが，近年普及しているものはカナダに住む経営コンサルタントのマイケル・リントンが 1983 年にバンクーヴァー島のコモックスではじめたシステムである。基本的には国家が流通させている貨幣（現金）を使用せずに物やサーヴィスを交換するシステムであり，主として各自に配布される通帳に取引の履歴を記録する。

こうした LETS を中心とする「地域通貨」は，現在日本で確認されるだけでも 30 以上の団体が活動を行い，世界の状況は 3,000 を超えると報告されている。ヨーロッパではイギリスで 500，フランスで 300 といった状況だが，スペインでの状況は報告がほとんどない。筆者が「カタルーニャ自治州」を調査した結果，約 30 団体が確認され，スペイン全体ではおそらく 50 以上の団体が活動していると推測される。

2. カタルーニャ自治州の地域通貨

スペイン第 2 の都市であり，カタルーニャの中心であるバルセロナから西に約 45 km の場所に，アルトペネデス県のカピタル，ヴィラフランカ・デル・ペネデス（人口 2 万 8 千，以下ヴィラフランカと略称）は位置す

表 1　ラトロッカの規則

1	LaTroca はメンバー間の相互扶助・団結・友好を促す団体である。基本的な機能となる原理は「与えれば受け取ることができる。より多く与えれば，より多く受け取ることができる」である。
2	LaTroca のメンバーになると 20,000 イリス (*iriz*) の残高を受け取り，LaTroca を離れる際には残高を 20,000 イリスと同額かそれ以上にしなくてはならない。どのメンバーも残高を 0 以下にすることはできない。LaTroca は負債の可能性が高いメンバーを助ける。
3	取引ごとの全ての詳細を明らかにする必要がある。それはサービスごともしくは時間ごとのイリスでの価格，また物を購入した場合のペセタの価格（この場合は領収書の提示が望ましい）である。価格には 1 時間の作業あたり 1,000 イリスを提案するが，場合に応じて取引相手各自で決定する。見積もりの難しい作業については LaTroca が指導する。
4	LaTroca は提供される物の品質に配慮する。個々の取引や価格の相違，合法性などの責任は各自のメンバーにある。
5	LaTroca のメンバーは提供された交換を受けるのも拒否するのも自由である。
6	入会に際して LaTroca のメンバーは 1,000 ペセタ，切手やコピーなどの事務経費のために出資する。財政的に出資が必要な場合や資金が底をついた場合は集会を開いて決定する。
7	LaTroca の集会は毎月最終木曜，午後 6 時から 7 時に行う。参加できない人は取引履歴を記した用紙を提出すること。
8	LaTroca のメンバーになることは以上の規則を受け入れることを意味する。

る。街は広大な葡萄畑に囲まれ，カバ (*cava*) という種類のワインの産地として名高い。

バルセロナ近郊にあるラトロッカ (*La Troca*) という「地域通貨」団体は 1996 年に設立され，実質的な活動メンバーは約 25 人である。不要になった持ち物やマッサージなどのサービスを，象徴的単位であるイリス (*iriz*) を擬似貨幣的に使用することで交換活動を行っている。ラトロッカの規則は表 1 に示すように 8 つからなっている。

ラトロッカに加入するには加入の意思を事務局に伝え，1,000 ペセタ（規則の 6 番にある毎年の経費だが，2002 年 1 月の欧州統一通貨 EURO（エウロ）の導入によって，6 エウロに変更となった）を支払うのと引き換えに，ラトロッカ内部の取引に使用されるイリスを 2,000 受け取る。ここで受け取るというのは入会したメンバーの口座に 2,000 イリス分の残高があるという意味で，その後の取引ごとに例えば A 氏が B 氏に本を 500 イリスで譲った場合，A 氏は自分の取引記載用紙にプラス 500 イリス，B 氏はマイナス 500 イリスと記入し，互いに確認のサインをする。

実際の取引は入会すると，メンバー全員の名前と電話番号が記載された会報が郵送で毎月届き，ここには各メンバーが何を提供できるのか，何を提供して欲しいのか，需要と供給の一覧が並べられている。これを参照することで希望の物やサービスがある場合に，各自が電話かけ，取引日時や価格（イリス）を決定し，取引を行うのである。またメンバー（ソシ，*soci*）になることは仲間意識の表明であると解釈されており，メンバーと友人（アミック，*amic*）はきわめて近いイメージで捉えられている。

援助（アジュダ，*ajuda*）と表現される行為にはモノやサービスを「受け取る側」ばかりでなく，それらを「提供する側」も含まれる。例えばメンバーが「英会話」を指導する場合，指導を受ける側は象徴的単位がマイナスとなり，指導する側はプラスになるが，指導をするために自分も以前より勉強をするという意味で，交換活動が相互の助けになるのである。

3. 対抗資本主義

こうした交換行為は従来，文化人類学の領域では「互酬 (reciprosity)」の概念によって捉えられてきた。ラトロッカの規則では 1 番にある通り，「与えれば，受け取ることができる。より多く与えれば，より多く受け取ることができる」と規定されているが，この文言はグールドナーが示した「道徳規範」としての「互酬」概念と共通点を持っている。

> もしあなたが他人に助けてもらいたければ，彼らを助けなくてはならない
> [GOULDNER 1960: 173]。

このグールドナーの定義に，計量性を加えるとラトロッカの規則になると考えられよう。その計量のメカニズムは，彼らが象徴 (*símbol*) と呼ぶイリスによって実践されるのである。このイリスは一般の貨幣に類似した計量的役割を果たすにも関わらず，彼らは決して象徴が「貨幣」であることを認めたがらない。この否定は，貨幣が国家やグローバルな資本主義活動と結びついている点を，暗に警戒することを示すものと思われる。

加えてメンバーとのインタヴューを通じて，「対抗資本主義 (*contra capitalisme*)」という概念が見出された。彼らは自分たちの活動を「経済的・社会的交換」と認識している。これは一般の貨幣を用いた交換よりも含む領域が広いという意識の表れであり，資本主義では実現できない交換領域を実践しているという自負がある。

だが個別の交換内容を確認してみると，さほど変わった交換財は見当たらない。確かに「車で駅まで送る」，「留守番」，「写真」といった内容は，仲間同士が交換を行うことで，貨幣を支払う場合とは異なるコミュニケーション領域が活性化するのであろう。だがそれがすぐさま「対抗資本主義」として解釈される点には疑問を抱かざるを得ない。

「対抗資本主義」概念を巡っては，その概念が発生する領域をマクロな理論的コンテクストに配置する作業が必要である。筆者は現在この課題を，ポランニーによる「統合形態」概念 [POLANYI 1977] を中心に据えた動態モデル［織田 2002b］を利用して考察を進めている。既存の「統合形態」としての資本主義システムの日常的な実践（労働や買い物）が人々の感情領域にマイナスの感情を喚起し，その意識が異なる活動への動機となって，計量化や交換といった性格を持ちながらも資本主義とは異なる「地域通貨」の活動に対して，「対抗資本主義」という認識が付与されていると解釈される。

参考文献

GOULDNER, Alvin W 1960, The Norm of Reciprocity: A Preliminary Statement. *American Sociological Review* 25(2): 161-78.

織田竜也，2001，「民俗学的交換論の構築へ向けて—諏訪大社

御柱祭における『ふるまい』を事例として―」『日本民俗学』228: 69-99.
織田竜也, 2002a,「政治経済への民族誌学的接近」『哲学』107: 105-30.
織田竜也, 2002b,「ポランニー経済人類学再考―統合形態概念のポジション―」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』53.
POLANYI, Karl 1977 [1980] *The Livelihood of Man*. Academic Press.(『人間の経済 I・II』玉野井芳郎・栗本慎一郎ほか訳: 岩波書店)

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

幼児のライム意識と仮名文字読み習得の関連

垣　花　真　一　郎*

目的

研究されている多くの言語において，音節の下位単位であるライムに対する音韻意識の発達が読みの習得を予測することが明らかとなっている (Goswami, 1999)。ライムとは，音節の母音と後半の子音（尾子音）を合わせた音韻単位である。例えば，/print/ という音節においては，ライムは /int/ である。音節の中にライムが含まれるということを自覚する能力がライムの音韻意識，あるいはライム意識と呼ばれる。このライム意識の発達が読みの習得と関わっていると考えられているのである。これまで，この分野の研究の多くは，アルファベット言語圏，特に英語圏での研究が盛んであったが，近年ではアルファベット言語圏だけでなく，中国語のような形態－音節文字体系を持つ言語圏においてもライムの音韻意識の読み習得との関わりが指摘されている (Ho & Bryant, 1997)。

しかし，日本語においては，モーラというライムとは異なる音節の下位単位に関する音韻意識の発達が読みの習得と関わりがあることが知られている（天野，1986)。モーラとは，CV（C＝子音，V＝母音）を基本とし，これに CCV（二番目の子音は流音 [j] に限られる)，単独の母音 (V)，音節の尾子音の位置にある鼻音（N: 撥音)，長音 (CVV 音節における後半の V)，それに促音 (Q) を加えたものである。日本語の書記体系である平仮名の一字一字は，モーラに対応し，そのため平仮名の読み習得にはモーラの音韻意識の発達が重要だと考えられているのである。一方，平仮名の習得とライムの音韻意識との関わりに関しては，拗音文字の習得との関係が指摘されているのを除けば（遠藤，1991)，研究はほとんど行われていない。しかし，中国語での知見は，ライムの音韻意識の発達が書記体系の形態を問わず，読み習得の前提条件となる可能性を示しているとも考えることができる。本研究は，ライム，モーラそれぞれに対する幼児の音韻意識の発達が平仮名の読みの習得とどのように関わっているかを調査し，読み習得過程に関わる音韻意識に書記体系固有性が見られるかという問題を検証することを目的とするものである。具体的には，ライム意識課題，モーラ意識課題，平仮名読み課題の 3 課題を平仮名習得の初期段階に相当する幼稚園児に対し実施し，その 3 者がどのような関係にあるかを検証する。

方法

被験児

東京都の私立保育園の年中クラス，年長クラスの児童 25 人（女児 12 名，男児 13 名)。月齢の平均は，68 ヶ月（レンジ 58 ヶ月～79 ヶ月)。

手続き

モーラ意識課題，ライム意識課題，平仮名読み能力検査をそれぞれの課題を一回ずつ，計 3 回に分けて，被験児ごとに個別に実施した。はじめに 2 種の音韻課題を行い，被験児のうち半分はモーラ課題を先に行い，もう半分はライム課題を先に行った。各課題の所要時間は 20 分前後であった。それぞれの課題の詳細は以下の通りである。

モーラ分解課題

Inagaki, Hatano, & Otaka (2000) のモーラ分解課題に準じた課題を行った。この課題は，絵カードで提示された語をモーラに区切って発音させながら，紙の上に書